

2026年 (令和8年)
2月号 (No. 969)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

数々のヒマラヤ遍歴を経て 「G・H・T」の全行程を踏査

関西支部 重廣恒夫

前号の沖允人会員に続き、秩父宮記念山岳賞を受賞された重廣恒夫会員に、受賞記念として寄稿いただいた。氏の業績は「日本山岳会のヒマラヤ登山への貢献およびヒマラヤについての普及活動」。山歴に見られるようにヒマラヤを舞台に大活躍、さらに80歳を目前にしてもなお衰えないその情熱に、敬意を表したい。

創立120周年という節目の年に、天皇陛下ご臨席の記念式典で栄誉ある秩父宮記念山岳賞を賜ることができましたことは、誠に光栄に存じます。橋本会長以下理事の皆様、審査委員会の委員長、委員の皆様、並びに推薦していただいた方々に篤く御礼を申し上げます。また、ヒマラヤ登山に誘っていただいた諸先輩方、一緒にロープを結んだ隊員の方々にも心より感謝を申し上げます。

憧れのヒマラヤ初見参は エベレスト南壁

私のヒマラヤへの憧憬は、ヒマラヤに向かった多くの人たちがそうであったように、中学2年のときに読んだフランス隊によるアンナプルナ初登頂(1950年)の記録『処女峰アンナプルナ』であり、56年の日本山岳会によるマナスル

目次

数々のヒマラヤ遍歴を経て
「G・H・T」の全行程を踏査……1

ニュージーランド南島・開拓週行報告
キャニオニングの楽園の、登るべき美溪……4

猪熊隆之講師の「山の天気ライブ授業」を
名古屋市内と金華山で開講……7

創立120周年記念事業・国際交流PJ
事業報告と今後への提言……8

山の名著再読……10

東西南北……12

支部だより……12

図書紹介……13

会務報告……15

ルーム日誌……17

会員異動……17

INFORMATION……18

新入会員……19

編集後記……19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月～金……10～20時
第1、第3、第5土曜日……10～18時
第2、第4土曜日……閉室
*閉室日の電話受付時間 10時～16時

初登頂により醸成されました。

高校生になると本格的に岩登りを始め、社会人山岳会にも所属、大学に入るとすぐに岡山クライマーズクラブに入会、同時に第2次RCCに所属しました。ヨーロッパの三大北壁を登り、高くそびえるヒマラヤ登山を目指し積雪期の岩壁の継続登攀を繰り返していましたが、71年春にオニツカ(現・アシックス)に入社、忙しい日々の仕事に明け暮れいつしかヒマラヤへの夢が潰えかけていました。

しかし、その年の8月に「エベレストに行かないか」と湯浅道男さん(第2次RCC代表)に声を掛けてもらいました。わざわざ神戸まで出向いていただき、73年の南壁登山隊への参加要請と募金および酸素器具調達の指示を受けました。



1980年、チョモランマ北壁を初登攀

残念ながら目標の南壁を初登攀することはできませんでしたが、初めての海外遠征で先発隊として4月初旬にカトマンズ到着後、ベースキャンプまでの偵察・隊荷の通関・輸送・ベースキャンプ建設・登山・撤収と、11月下旬までの約



1984年、カンチェンジュンガを縦走して中央峰に立つ

8ヶ月間に及ぶネパールでの生活は、ヒマラヤ登山に関わる多くのことを体験し、学ぶことができた。

その後、エベレスト南壁隊のマネージャーだった鹿野勝彦さんから「ナンダ・デヴィに行かないか」と誘われ、75年日本山岳会に入会し、参加しました。宮下秀樹さんには80年のチョモランマ登山隊への参加を要請され、その体験は日本山岳会でのヒマラヤ登山継続の礎になりました。

チョモランマ登山のとき、品質管理の神様」と言われた西堀榮三郎総隊長から伝授された無線機の運用(それまでの朝・昼・晩の定

時交信ではなく、24時間交信態勢とせよ)は、その後の登山隊で登攀リーダーや隊長を務めたときに活用させていただき、行程管理と隊員の安全を確保するために、隊員の動きが視認できる最前線で指揮を執ることを貫きました。

また、88年の三国友好登山隊では、マナスル初登頂者の今西壽雄総隊長とともに各国関係者と回数を重ねて打ち合わせをしましたが、企業人としての慧眼に感服するとともに組織運営のイロハを学びました。そして、最前線の登攀隊長として、指定された5月5日に交差縦走と宇宙中継を成功させるための重責を肝に銘じました。

私のヒマラヤ登山(グレート・ヒマラヤ・トラバースは別として)は、1973年から2016年までに13回ですが、本人の意欲だけで登山隊に回数を重ねて参加できるわけはなく、これまで多くの先輩や同輩、および勤務先の理解と支援があったからにほかなりません。

88年の中国・日本・ネパール三国の交差縦走からは、大先輩の齋藤惇生・村井龍一・橋本清・伊丹紹泰さんとその周りの方々にヒマ

ラヤ行きを鼓舞され、望外の後方支援を受けました。それらの支えが95年(日本山岳会創立90周年記念事業)のマカルー東稜初登攀成功をもたらし、その後続く若い人たち(96年・青年部K2登山隊、97年・ダウラギリI峰登山隊、98年・カンチェンジュンガ登山隊)の登山や、竹内洋岳君の日本人初の8000m峰14座登頂につながりました。

「グレートヒマラヤトレイル」の存在を知る

ネパール国内の「グレートヒマラヤトレイル」はNHKBBSで放映されましたが、これまでの映像とは違うドローンによる映像が映し出されたこともあって、ヒマラヤが多くの人たちに関心を持たれることになったことは、皆様ご存じのとおりです。

私がグレートヒマラヤトレイルの概念を知ることになったのは、81年1月から11月にかけてピータ・ヒラリー(世界最高峰エベレスト初登頂者エドモンド・ヒラリーの息子)とチュワン・タシ、グレイム・ディングルがシツキム・ヒマラヤからカラコルムまで歩いた

報告書『世界の屋根を歩くーヒマラヤ五千キロ初縦断』を手にしてからです。

その後も多くの外国人が、ヒマラヤを舞台にした長距離行を重ねていました。さらに、5年の調査期間を経て2008年から09年にかけて、英国生まれのロビン・ブーステッド率いるチームによって初めてネパール国内の「グレートヒマラヤトレイル」1700kmが踏破されたのも大きな刺激となりました。

私の「グレート・ヒマラヤ・トラバース」構想の発端は、95年に遡ります。チベット側からのマカルー登山終了後、次なる未踏の山を求めて、ラサからランドクルーザーでヤルンツァンポー河岸を西へひた走り、パイクー湖を経て吉隆鎮の南に位置するネパールとの国境周辺を偵察しました。帰路はネパールとの国境に近い道路をシツキムに接近しながら走り抜けラサに戻りましたが、その道中で頭に浮かんだのが、これまで登った山々を回遊する「ラウンド・ヒマラヤ」でした。

92年に日本山岳会が初登頂した、ヒマラヤの最東端に位置するナム



2016年、ナンガマリⅡ峰に初登頂

7回にわたった踏査は、コロナ禍のために1年半の休止を余儀なくされましたが、ネパールヒマラヤ、インド・ヒマラヤ、カ

チャ・バルワ(7782m)からK2(8611m)までの、国境に位置する山々の麓をぐるりと回る大きな周回計画です。しかし帰国後は、96年の「日本百名山連続踏破」を皮切りに「中央分水嶺踏査」「ラウンド琵琶湖」「四国分水嶺踏査」「近畿分水嶺踏査」「関西県境縦走」などの縦走登山を連続して行ないました。

さらに「二百名山登山」「ふるさと名山探訪」「ふるさと富士探訪」「中央分水嶺の山を登る」「歴史峠トレッキング」「三県境の山を登る」など、1枚の地図から山を見つけ、計画を作り、自らの力で安全を確保する啓発登山や、『新日本山岳誌』に掲載された約4000の山を目標にした「チャレンジ4000」などの国内登山(ネパール

やパキスタンでのトレッキングや、2016年のナンガマリⅡ峰登山は別として)に年間120日前後を費やし、いつしかヒマラヤは遠い存在になっていました。

「G・H・T踏査」を発案

2017年、日本山岳会の副会長に就任し、記念事業担当となりました。25年に迎える創立120周年の記念事業で何をするか模索する中で頭に浮かんだのが、「ラウンド・ヒマラヤ」ならぬ「グレート・ヒマラヤ・トラバース(G・H・T)」でした。

ただ、地勢的な理由や資金的な面から、92年に初登頂したナムチャ・バルワからの開始やシッキム・ヒマラヤの踏査は諦め、2020年春からスタート、世界第3

位の高峰カンチェンジュンガから世界第2位のK2までの、約5000kmの踏査を行なうことにしました。

「私のツルギヤ登頂歴」

- 1973年秋・ネパール／エベレスト(8848m) 南壁8380mに到達(RCCⅡ)
- 76年春・インド／ナンダ・デヴィ東峰(7434m) 第2登(日本山岳会)
- 77年夏・カラコルム／K2(8611m)南東稜第2登(登攀リーダー、日本山岳協会)
- 79年夏・カラコルム／ラトックI峰(7145m)南壁初登頂(登攀隊長、京都カラコルムクラブ)
- 80年春・チベット／チョモランマ北壁初登攀(登攀リーダー、日本山岳会)
- 84年春・ネパール／カンチェンジュンガ南峰(8491m) 中央峰(8478m) 初縦走(登攀リーダー、日本山岳会)
- 85年夏・カラコルム／マツシャーブルム(7821m) 北稜／北西壁初登攀およびブロード・ピーク(8047) 連続登頂(登攀隊長、関西登高会)
- 88年春・チベット／チョモランマ(8848m) 交差縦走(登攀隊長、日本山岳会)



バルトロ氷河のコンコルディアにてGHTメンバーと

- 長、日本山岳会)
- 90年秋・チベット／ナムチャ・バルワ(7782m) 偵察(隊長、日本山岳会)
- 91年秋・チベット／ナムチャ・バルワ(7782m) 敗退、ナイプン峰(7043m) 登頂(隊長、日本山岳会)
- 92年秋・チベット／ナムチャ・バルワ(7782m) 初登頂(隊長、日本山岳会)
- 95年春・チベット／マカルー(8463m) 東稜初登攀(隊長、日本山岳会)
- 2016年秋・ネパール／ナンガマリⅡ峰(6209m) 初登頂(隊長、日本山岳会関西支部)

REPORT

ニュージーランド南島・開拓廻行報告 キヤニオニングの楽園の、登るべき美溪

南島のハースト川流域へ

沢登りは、険しい地形の中にあつても生命の息吹を感じ取り、地形・水・植生の関係を全身で理解できる、日本発祥の山岳文化である。ニュージーランド(NZ)では沢を下るキヤニオニングが非常に盛んで、専門の協会や書籍まで存在するが、沢登りはほとんど行なわれていない。溪谷そのものが敬遠されているわけではないのに、なぜ登られないのか。そのような疑問を持ったのが、今回の遠征の出発点である。

NZの空中写真や地形図を眺めた結果、南島の南アルプス山脈西部、ハースト川流域に狙いを定めた。この地域は典型的な海洋性湿润気候で、降水量は年間6000mm以上にも達し、日本一とされる屋久島の山岳地帯に匹敵する。

Pyke Creek本流の南俣廻行(12月29~30日)

沢極麗 丸山舞・丸山智朗

この沢には氷河湖を源流とする落差400m程度の大スラブ滝があり、当初より廻行対象として考えていた。貴重な晴れ間に狙いを定め、いざ入溪。下部は片岩の美しいゴルジュから始まるが、すぐに登れそうにない大滝が出てきて巻きに入る。その先のゴルジュも登れない滝が多く、巻きを絡めて進むと開けたゴロ帯に出た。目の前にこれから登るスラブ滝が圧倒的な存在感を放っている。

ゴロ帯が終わる直前で幕営装備をデポし、早速本流の廻行を開始。全てがスラブ滝というわけではなく、下部はスラブをうがった滝・釜・小ゴルジュが続く。青空をバックに轟々と落ちる滝とお花畑が映える上、全てフリーソロで快適に登れる。氷河湖から轟々と流れ出る水は融雪出水も相まって迫力があり、非常に冷たい。登っていくと次第に傾斜が緩み、目標としていた氷河湖へ到着。雪をかぶったBrewster氷河が白く輝き、

真っ青な氷河湖との対比が見事だ。360度嘘みみたいな景色が続く、嘘みみたいな沢であった。「開放的な美溪」で、これを超える沢に今後出会えるだろうか？

翌日は南俣を廻行。南俣は本流と比較するとゴルジュが発達しているため厳しい廻行になるかと戦々恐々だったが、なんとまあ美しく登れるゴルジュではないか。越後の沢をスケールアップしたような空間が続き、フリクションも良く、全てフリーソロで快適に廻行できた。本流と南俣の表情の違いに感動し、満足しながらBrewster Hutへのトレイルを利用し下山した。

Cross Creek廻行(12月31日)

Cross Creekは、下部のみがキヤニオニングで親しまれている。ポットホールや穴が開いて石橋状に削れた岩盤など、片岩の美しく不思議な造形が続くゴルジュは人気なのも納得だが、登ろうと思う



Pyke Creek本流上部の大スラブ

と厳しい箇所も少なくない。途中上から現地のキヤニオニアが降りてきて、「登るの? マジ?」みたいな反応をされた。

森林限界を超えると、黄金色の草原と露岩帯が広がる。このあたりから登れる滝や美しいナメばかりになり、最高。適当な所で沢沿いから外れ、草原を歩いてMt.Cross山頂へ。360度絶景の空間だった。Cross Creekは沢登りとしても面白い、ぜひ上部まで詰めるべき沢である。



Access Peak East Creek (仮称) のゴルジュを突破する

一瞬だがガスが薄くなった。ハングした大滝

Milford Sound へのアクセス
Peak East Creek (仮称) (1月2日)
Milford Sound は、フィヨルドが織りなす壮大な景観が特徴の、NZ ぎつての人気観光地だ。融雪出水も相まって、信じられないスケールの大滝が大岩壁に何本も懸かっている景色の中、沢登りとしてなんとかなりそうなスラブ大滝を発見した。

翌日に突撃。生憎の曇り空とガスだが、入渓早々に岩盤が露出した滝が始まる。このあたりの地質は斑禰岩系の深成岩で、ハースト川流域とは違った印象だ。いきなり落差300mもの大滝が出てくるが、傾斜は緩くて草付もあり、順調に登攀。ゴルジュ帯に突入し、振り返るとガスも相まって幽玄な景色が広がる。

際どい登攀でゴルジュを抜けると、今度は100m以上の大滝が

群はやはり登れそうな代物ではない。巻き気味に登れる可能性もあるが、このあたりは植生もなく、降りられるという保証がない。名残惜しい気持ちもあったが、満足して下山を開始する。氷河が造り出す芸術的かつ壮大な地形を間近で感じ、触れることができてとても良かった。

現地遊び・文化に触れる

◇Harwood's Hole 下降(12月27日)

石灰岩台地をうがつ200mの巨大堅穴を下降した先に広がる、ケイブ・キャニオニングの世界。洞窟の中で青く澄んだ湧水が集まり、地底の渓谷となっている。その異世界っぷりに頭の処理が追い付かず、強烈な印象として焼き付けられた。下降支点などは意外としっかり整備されており、現実に戻き戻しにくれる。

◇Lower Fish River 遡行 (1月3日)

国道のすぐ脇にある、真っ青に澄んだ水を湛える大水量、ゴルジュを探索。地形のスケールに触れながら、泳ぎやへつりで内部を進み、地形観察大会を楽しんだ。

◇Robinson Creek 下降 (1月3日)



Imp Grotto のドーム状の滝を40m懸垂下降

ドーム状にえぐれたゴルジュは、谷底から空が見えない。そんな不思議な空間も、キャニオニングならロープで降りるだけで内部を探索できる。しかも、たった2時間で。確かにNZのダイナミックな地形を楽しむ上でキャニオニングが人気なのも納得だ。

◇Imp Grotto 下降(1月6日)

国道から狭いゴルジュの中に絶望的な滝が見える。名前のとおり不可能な洞窟を彷彿とさせる谷だ。ハイトは、40m懸垂でドーム状の滝を降り、途中のポットホールに着する所。何をどうやってこんな地形になるんだ。



Zig Zag Creekの美しい連瀑帯を登る

登りだ。

二俣で登れる滝が多
そうなる北俣廻行を選択
した直後、森が沢と近
くなり、緩やかで美し
いゴロ帯に癒される。
さらには扇状の斜瀑、
ポットホールのがた
れたナメ、シャワーを
浴びながらロープを出
す滝、煌めく釜、コケ
の絨毯、快適に登れる
滝群等々、変化に富ん
だすばらしい溪相だ。
Cross Creekのスケー
ルアップ版を想像して
いたが、全然違う。沢
登りのあらゆる要素が濃縮された
秀溪だ。

やがて森林限界を迎えると、息
をのむような空間が広がる。プロ
ンズ色の草原にナメ、釜、小滝が
連続するこの上ない美溪だ。17時
ごろ、草原をうがつ谷地形の中で
快適な平地を見つけ、ここで幕営
する。整地不要なコケの絨毯だが、
ジメジメしていない。斜瀑を眺め
ながら寝転ぶ。この上ない贅沢で
ある。

翌朝も、どこまで行っても美し

いブロンズの草原と連瀑帯を進ん
でいく。大きな雪田が出てきたあ
たりで、後ろ髪を引かれながらも
南俣へとトラバース。南俣へ入る
と、ナメだけでなくガレが目立つ
ようになってきた。すぐ隣の谷筋
なのに北俣と比較して岩が脆いよ
うだ。

クライムダウンと巻き下りを合
わせながら下っていく。やがて大
滝が現われ、側壁も高くなり、澄
んだ釜と大滝を交互に眺めながら
懸垂下降が連続する区間へ突入し
た。登りだと、高巻き主体になっ
てしまいうらう。だいぶ下った所
で、キャンピング用の目印や支
点が現われた。本当の美溪はこの
上流にあるのに、キャンオニアは
それを知らない。なんたる優越感。
やがて二俣まで戻ったので、沢を
出て左岸側の適当な斜面を歩いて
下山した。

NZこそ沢登りの天国

今回訪れた沢たちはどれも短く、
そしてさほど困難でもなかった。
しかし、だからこそ、今回の開拓
廻行の価値は大きいと考える。訪
れやすいのに、日本のどの沢をも
超越する、開放的美溪を味わえる

のだから。

今回の開拓は、日本人の海外に
おける廻行に対する考え方を、そ
して、NZ人の沢への考え方を覆
し得る。NZこそ、沢登りを行な
うべき国である。今後、多くの沢
ヤがNZを訪れ、NZ人のキャン
オニアも沢を源頭部まで探索する、
そんな未来を楽しみに、布教活動
を進めていきたい。そう思えるほ
ど、行かないのが勿体ないと思え
るような、すばらしい沢ばかりで
あった。

今回は、JACの海外登山助成
金をいただいたので、このような実り
のある開拓廻行を行なうことがで
き、大変感謝している。



Zig Zag Creek北俣で斜瀑を眺めながら幕営する

REPORT

猪熊隆之講師の「山の天気ライブ授業」を
名古屋市内在と金華山で開講

初日は名古屋市内で座学講習

東海支部では、日本山岳会創立
120周年記念行事である猪熊隆
之氏による「山の天気ライブ授業」

金華山上の岐阜城天守閣にて、猪熊講師による観天望気の授業を受ける

東海支部 清水克宏
を、1月17日(土)の新年会に合わせ
名古屋市内のOMCビル講堂で座
学を、18日(日)に岐阜市の金華山で
ライブ授業を実施した。

17日の座学の前半は、気象遭難
の理論面について次の
ような説明を伺った。
気象遭難のトップ4は
低体温症、落雷、沢の
増水、突風による転滑
落。気象遭難を回避す
るには、山にどのよう
な気象リスクがあるか
を「知り」、様々な想定
シチュエーションにあ
らかじめ「備え」、実際
リスクに遭遇したとき
正しく「行動する」のが
重要とのこと。
リスクは降雨の程度
や、尾根か沢筋かなど
とるルートによっても
異なるので、雨・晴れ
などと示されるだけの
天気予報に頼るのでは

不十分で、的確に情報を収集し、安
全な行動とルート選択が求められ
る。そのためには、(1)登山前日に
天気図を確認する方法、(2)登山中
に雲や風を確認する「観天望気」ス
キル、低体温症などへの対策など
を身につけることが必要だと知っ
た。

そして後半は、「天気が崩れる
のは雲ができるからで、雲が発生
するかどうかは、上昇気流、水蒸
気の量に左右される」という法則
を前提に、海との位置関係(地図)
および等圧線の間隔と向き(天気
図)の確認方法、低体温症への対処
法、登山中の観天望気の方法、引
き返しポイントの設定方法などを
具体的に教えていただいた。

岐阜城天守閣から観天望気

翌18日は、織田信長が山頂に岐
阜城を築いた金華山に登りつつ、
予想天気図や、気圧850hPa面と
500hPa面の気温+風予想図、
「これだけは覚えておきたい!
危険な雲」の資料を手に、ライブ授
業を体験した。

あいにく(?)ほとんど雲のない、
風も穏やかな日だったが、天然の
要害になっている岩稜上からの見

晴らしや、信長も眺めたであろう
天守閣の最上階から観天望気し、
気象悪化時の引き返しポイントを
どこに設定するか、などを学んで
いった。特に局地雷雨など局所気
象災害は登山中における観天望気
が重要で、どの高さに、どのよう
な雲があるか、その雲が「やる気」
を出しているかを観察ポイントと
することが大切だ、と教えていた
だった。

金華山は、標高329mながら
長良川に面した独立峰だけに、信
長も堪能したことだろう大展望が
広がる。そんな山上の風景を、た
だ楽しむだけでなく、伊吹山や能
郷白山方向からは日本海側の冬の
季節風がもたらされ、内陸側の御
嶽山や北アルプス方面からは乾い
た風が吹き、濃尾平野越しの伊勢
湾からは夏の湿った空気が積乱雲
を湧き上がらせるなどイメージし
ながら観天望気すると、より山に
対する理解が深まるように感じら
れた。

今回の講習をきっかけに、猪熊
講師の著書『山の観天望気―雲が
教えてくれる山の天気』などを参
考に天気を読むスキルを高めて、
安全登山に努めたい。

REPORT

創立120周年記念事業・国際交流PJ 事業報告と今後への提言

国際交流PJリーダー 桐生恒治

昨年12月6日(土)、創立120周年記念事業の一環で、国際交流として記念講演のヨッヘン・ヘムレブ氏(イタリア)と海外の登山団体11団体・29名を招待し、120周年をともに祝い、旧交を温めて国際交流の絆を次世代へ継続・発展させることを願って実施した。今回、記念事業募金の「国際交流PJ」に多大なご寄付をいただいた方々、さらに韓国(UA A A・C A C・K A F)やネパール(N M A)からのご寄付をいただき、深く感謝し御礼申し上げます。

海外登山団体から29名が参加

2024年9月度の理事会で創立120周年記念式典の内容を協議した際、交流ある海外登山団体を招待し会員の国際交流意識を高め、理解を広めたいと提案した。10月度理事会で起案書を提出し説明したが、費用面の不安を理由に強い反対意見もあったが、経費は記

念事業募金で集めた募金額に応じて内容を修正し、本部からの財政支援には一切頼らないと断言した。

翌11月から25年1月まで、国際交流の有識者から意見を聞く準備会を開催したが、一家言を持つお歴々の方々の意見集約は難しく、最終的にヘムレブ氏の記念講演と交流ある海外10団体・20名規模で招聘する案でまとまった。2月から「国際交流PJ」を立ち上げて、ヘムレブ氏招聘は国際委員会に交渉を依頼、海外登山団体招聘は、会報4月号で各支部・同好会・委員会・記念事業PJなどに公募を行ない、国際交流のための募金趣意書を作成し、橋本清・募金委員長はじめ募金委員会に協力をお願いをした。

6月末までにヘムレブ氏から記念講演の快諾が得られ、宮城支部やアルピニズムクラブ、そしてアルバータ・エクアドル・G H T・山岳祭などの各記念事業PJから16団体の招聘要望があった。8月

早々、英文招待状を作成し海外招聘団体に送付、10月末時点の参加者は夫婦同伴や通訳者の追加もあり14団体・35名程度となったが、募金委員会の精力的な活動により資金的な目途が立った。

開催直前の11月末までビザ取得遅れや直前キャンセルもあり、最終的に講演者ヘムレブ氏を含めカナダ山岳会(2名)、パキスタン山岳会(2名)、韓国山岳会(3名)、中国登山協会(1名)、中華台北山岳協会(4名)、中華台北健行登山会(2名)、エクアドル山岳連盟(2名)、大韓山岳連盟(1名)、モンゴル山岳会(4名)、ネパール山岳協会(4名)、アジア山岳連盟(3名)の合計29名の参加となった(A B C順)。

前日にウエルカム・パーティ

12月5日(金)18時、京王プラザホテル3F受付に海外招待者が集合し、19時から44階でウエルカム・パーティを開催したが、参加者数の制限もあり、海外招待者29名と国内関係72名の約100名の方々



祝賀晩餐会で壇上に上がり、記念写真に収まる海外からの参加者たち

に参加いただいた。大谷亮会員の司会進行が始まり、橋本しをり会長は歓迎の挨拶で「日本山岳会創立120周年記念式典にご出席いただき、感謝申し上げます。今回の式典を機に皆様との相互理解と連携をさらに進めたい」と述べた。続いて招待者代表としてカナダ山岳会マイケル・モーターマイ氏(元UIAA副会長)から挨拶をいただき、小林政志元会長と古野淳前会長から挨拶と乾杯の音頭を取ってもらった。海外招待者とは以前からの友好関係もあり、すぐに



快晴で富士山も遠望できた高尾山ハイキング

打ち解けて旧交を温めながら会場は一気に盛り上がった。

その後、坂井広志会員編集の映像上映が始まり、ウェストンとJACCの関係を海外招待者に知っていただくため、2024年6月、天皇陛下英国訪問時にチャールズ国王がウェストンについてスピーチされたビデオが紹介された。さらにヒマラヤン・クラブのハリッシュ・カバディア元会長とアルパイン・クラブのリチャード・サイモン会長からのビデオ・メッセージも紹介され、本会の中村保名嘗会

員がアジア山岳連盟(UAAA)からも名誉会員に推挙された、と李仁禎会長から報告があった。

そして、各国登山団体参加者全員がステージ上で紹介され、会場から盛大な拍手が送られた。会場到着が遅れたヘムレブ氏にも急遽、壇上で挨拶をお願いして、あつと言う間に所定の歓談時間が過ぎた。最後の閉会挨拶でUAAA顧問でもある神崎忠男会員が「世間では戦争・紛争のニュースばかりだが、我々登山界や山仲間には平和しかない。これからも登山を通じて国際交流を深めたい」と呼び掛ける。と共感の拍手が送られた。

全て女性陣がスピーチ

12月6日(土)、創立120周年記念講演会と記念式典・祝賀晩餐会については、会報「山」2025年12月号に報告済みだが、天皇陛下にご臨席いただき、ウェストンの母国・英国から駐日大使ご夫妻にもご来賓として参加いただいた。ヘムレブ氏の講演は和田薫・国際委員長が日本語通訳を担当。祝賀晩餐会では、橋本会長の開会挨拶に続きジュリア・ロングボトム駐日英国大使のご来賓挨拶があり、

鏡開きの後、カナダ山岳会イザベル・デニヨ会長の挨拶と乾杯の音頭で祝宴に入ったが、全て女性陣のスピーチが続き、例年と異なる華やかな雰囲気であった。

テーブルごとに和やかな会話が弾み全国各支部が紹介されたが、その前に式次第プログラムにあった「海外来賓紹介」を行う予定だったが省略されてしまった。その後紹介のアナウンスがなく、せっかく参列された海外参加者の紹介がなかったことは国際交流において儀礼を欠く大失態で、今までの努力が無となり、非常に遺憾であった。

12月7日(日)は、海外招待者との親睦を図るフリータイムとし、一部招請部門は各々の計画で交流してもらい、それ以外の22名の方は観光小旅行として高尾山にご案内した。快晴の下、初冬の陽さしを浴びてのんびり散策し、昼食は薬王院で精進料理を味わってもらい、東京支部主催の記念山行参加会員とも交流を図った。

帰路はJR立川駅近くのホテルにチェックインしてもらい、夕方地元の居酒屋でサヨナラ・パーティを開催した。橋本会長や会員の

日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSCA)町田幸男会長も出席していただき、総勢100名弱での親善交流の機会となった。

これを契機に国際交流を

最後に、創立120周年のお祝いで来日された海外登山団体から、日本山岳会との共同事業や合同登山の打診があり、関係者にお伝えした。24年にJMSCAから日本山岳会にUAAA30周年記念事業としての協力依頼があり、越後支部が高頭祭やいまつ登山祭に海外登山団体の参加を引き受けた経緯がある。

そして25年には、創立120周年記念事業としての国際交流で親睦を深めた。今までの日本山岳会には、海外登山団体との協力事業や合同登山の経験者が多くおり、その強い絆が現在まで継続していることを痛感した。しかるに、現在の日本山岳会は国際的組織には未加盟状態で、海外との交流機会的手段がない「鎖国状態」である。今回を契機に国際的組織に加盟して、海外登山団体とのパートナーシップを構築して欲しいと切望し、今後の日本山岳会への提言とする。

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

⑤『炉辺山話』

(岡茂雄著・実業之日本社)

久保田賢次

7年前、長く登山やスキーに關わる仕事をさせてもらった出版社を定年退職した。入社時は新橋に近い御成門にあった勤務先も、溜池、九段といくつかの街を転々としたが、最後の数年間を神田神保町で過ごせたことは幸運であった。本と山が好きな私にとって、書店や登山用具店が立ち並ぶこの街はまさに天国。毎日、昼休みには古書店を巡り、定年後じっくり読もうと山岳書を漁り、レトロな喫茶店の片隅で手に入れたばかりの本のページを繰るのは、至福の時であった。

ある日、なじみの古書店の棚で



昭和50 (1975)年初版発行

『本屋風情』という背文字に惹き付けられた。著者の「岡茂雄」という名には覚えがある。陸軍軍人から転じて岡書院や梓書房という版元を起こし、民俗学や考古学の専門書、山岳の紀行図書などを手掛けたことは、登山史を記した書物などで知っていたが、「本屋」という言葉が、じきに本の業界から離れる私の心に刺さったのだと思う。書名の由来も面白い。岡がある会合に参加したとき、民俗学者の柳田国男から「なぜ本屋風情を同席させたのか」と苦言を呈されたことを逆手に取って付けられたものという。

ぜひ、ほかの著書も読んでみたいと、次に入手したのが本書『炉辺山話』の初版本であった。1975年に実業之日本社より刊行され、98年に平凡社ライブラリーとして『新編 炉辺山話』が出たが、残念ながら今は品切れ中とのことだ。

「生れ育った信州松本の辺に、散らばっているそれ等の落穂を、ポツポツ拾い集め、炉端で櫂ほだをくべながら、その一つ一つをとり上げては語る気持ちで記録した」とまがきに記されているが、「第一部 落穂」「第二部 詮索」「第三部 追憶」「第四部 拾遺」(第四部は新編で追加の各部に、次々と興味深い話が綴られている)。

第一部には初期に山岳写真を扱った保里写真館、日本人女性の穂高初登り、山の画人・武井真澄のエピソード、松本付近の交易に舟運が利用されていたことのほか、「落穂」と呼ぶにはもったいないような話が盛り込まれている。第二部では鉢伏山、美ヶ原、五竜岳、高地などの山名・地名についての深い考察や史話が述べられており、第三部と第四部には山岳誌『山』や『山日記』の創刊にまつわる話、小島鳥水、武田久吉、松方三郎、茨木猪之吉ら、日本山岳会の一員である私たちにとっては、登山界の先達としてなじみ深い登山家や文筆家、画家らとの交流が綴られている。

山の文芸誌『アルプ』に寄稿された短文が多いので、書名のとおり

囲炉裏端いろりでくつろいで、著者の語りいりに聞き入るうちに、大正から昭和の初めごろの登山世相や、時代を生きた先人たちの人柄や思いを感じ取ることができる。

新編の巻末には岡が起こした2つの版元の出版目録が10ページにわたって収められている。しかし、その出版活動は長くは続かなかつた。

随筆家の山口耀久あきひさが解説にこう記している。《出版人として一流の見識と、すぐれた実行力をもっていたが、事業家としては失格だった。良い本を造ることにのみ良心のすべてを注いで、本を商品しやうひんとして販売する情熱がまるで希薄なのである。》

今、私の家の書棚には、古書店を徘徊するたびに増えていった、岡が手掛けた良書が数冊並んでいる。丈夫な本造りを標榜し、「装釘」という言葉を好んで使った(一般には「装幀」を使う)というが、日に焼けて黄ばんではいるものの、刊行から三四半世紀を経てなお、軍人から出版の世界に身を投じた岡のこだわりが、確かに感じられる作品である。

(図書委員会委員)

⑥『エンデュアランス号漂流』 (A・ランシング著・新潮社)

北島洋一

名著紹介としては、本来ならE・シヤクルトン本人が書いた本を名著とすべきでしょう。彼の『SOUTH南へ』という本の抄訳本『エンデュアランス号漂流記』(中公文庫)が日本では多く読まれているようですが、私は今回、この本以外も紹介することにしました。南極の氷に閉ざされて沈んだエンデュアランス号から、乗組員全員を奇跡の生還へと導いたのがシヤクルトンです。スコット隊のチエリー・ガラードが『世界最悪の旅』という本の最初に、「科学と地理学を合わせた組織だったら私はスコットを選び、極点へ突進あるのみということならアムンセンだ。そしてひどい穴に落ち込んでそこから出たいなら、常にシヤクルトンだ」と書いています。その危機的



平成10(1998)年初版発行

な状況でのリーダーシップが、1970年代に企業経営において注目されるようになり、次々と本が出版されるようになりました。

シヤクルトンは最初、スコット隊の南極探検に参加しました。しかし、このときは壞血病や喘息などを理由に途中で帰されてしまいました。次にシヤクルトンは、スコットとは別に自ら探検隊を組織して南極点を目指します。そして、南極点へあと180km以内という所まで到達するのですが、残りの食料を考えると無理と判断して引き返します。一緒に行ったアダムズがあと1時間進んでいたら命がなかつただろう、と語っています。このとき、仲間が南極の火山であるエレバス山(3794m)に登頂するなど成果は上げています。

その次が、いよいよエンデュアランス号による探検です。このときすでにアムンセンが南極点に到達していましたから、シヤクルトンが狙ったのは、南極大陸の横断です。第1次世界大戦が始まった年でしたが、英国海軍は探検続行を命じます。シヤクルトンはウェッデル海から南極点を目指し、反対側のロス海側からも補給のための支援隊を派遣します。支援隊は、残念ながら3人の死者を出しますが、シヤクルトンが率いた隊は、28人全員が生還できました。それは困難を乗り越えて、奇跡とも言える生還だったのです。

氷に閉ざされ、破壊されてしまったエンデュアランス号からボートで無人島のエレファント島へたどり着きます。さらにそこから助けを求めに行かなければなりません。捕鯨基地のあるサウス・ジョージア島は、エレファント島から西に1280kmと、日本の本州の長さと同じくらい距離がありますが、小さなボートで向かったのです。途中で嵐に遭いながらもたどり着きますが、捕鯨基地は島の反対側でした。急峻な岩と氷の山を越えてやっと捕鯨基地にたどり着き、エレファント島に残った仲間も助けることができたのです。これがシヤクルトンの冒険のあらましです。そして本の紹介ですが、シヤクルトン自身が書いた本には、あまり仲間たちのことが詳しく書かれていません。実は、シヤクルトンの命令を聞かず反乱とも言えそうなことも起きているのですが、一切シヤクルトンはそのことを書いていません。

2024年に冒険家のラヌルフ・ファインズが書いた本が出ました。彼に言わせると、これまで出たシヤクルトンの本には、事実が捻じ曲げられて書かれているものもあり、それが我慢ならず執筆を思い立った、とあります。この本は、シヤクルトンの良いところもそうでないところも含めて取り上げ、それでもシヤクルトンを尊敬する気持ちから書かれています。

過去に出た本では、キャロライン・アレグザンダーの『エンデュアランス号』やジェニファー・アームストロングの『そして奇跡は起こった』の2冊は、掲載されている写真も多く、お勧めできます。そして、名著と言える本としては、私は、アルフレッド・ランシングの『エンデュアランス号漂流』を挙げたいと思います。乗組員たちのことも詳しく書かれており、全体像がよくつかめるからです。この本は文庫化された本(新潮文庫、2001年)が現在でも手に入ります。

(図書委員会委員)

茨城支部

**関東4支部合同懇談会を
奥久慈・大子町で開催**

1月24日・25日の両日、恒例の千葉、栃木、群馬、茨城の4支部による合同懇談会が開かれた。今回は茨城支部の主催で、県北の大子町にある大子温泉やみぞホテルを会場に各支部の活動報告や講演会が行なわれ、翌日は全長320kmの計画で整備が進む常陸国ロングトレイルの一部である生瀬富士の登山と、袋田の滝などを見学する班の二手に分かれて、冬の奥久



4支部から26人の関係者が集まった

慈の風土と自然を味わった。参加者は千葉支部から6人、栃木支部関係者11人、群馬支部3人、茨城支部6人の合計26人であった。

1日目、奥久慈清流ラインとして親しまれている水郡線や、マイカーなどで各地から駆け付けた参加者が昼過ぎに会場に集合した。14時に茨城支部の浅野勝己支部長の挨拶により開会。千葉支部の松田宏也前支部長、栃木支部の渡邊雄二支部長、群馬支部の根井康雄支部長、茨城支部の星埜由尚事務局長から、順にこの1年の活動や山行などが報告された。

続く講演会ではインド・ヒマラヤのキャンツエII峰(6270m)の登頂レポートを茨城支部の吉井英生会員が、続いて「常陸国ロングトレイルへの取り組み」として、同支部の和田幾久郎会員がそれぞれ発表した。

入浴休憩の後、18時30分から、今回の懇談会を主催する群馬の根井支部長の乾杯の音頭で懇親会が始まり、地元の名物料理を味わいながら和やかに時を過ごした。終盤には茨城の名山、筑波山に伝わる伝統芸能、ガマの油売り口上も披露され、千葉支部の三田博支部長

の挨拶で締めくくられた。

2日目は登山班と観光班の2班に分かれて行動。16人が参加した登山班はホテルのバスで袋田温泉まで移動し、生瀬富士(406m)から立神山とたどり、袋田の滝を見下ろす滝のぞきを経て、生瀬滝の上を徒渉するという約4kmのコースを歩いた。急な登り下りや頂上直下の岩場の通過もある生瀬富士には、茨城のジャンダルムと呼ばれて近年人気を集めている岩尾根もあり、変化に富んだコースと、標高は低いが幾重にも山並みが連なる久慈山地の展望を味わった。

観光班には7人が参加。近年は凍り付くことも少なくなつたが、今年は寒波の襲来で氷結し、優美な姿を見せてくれた袋田の滝の見学や、廃校となつた小学校を再利用して、名物だいたいおやきを製造、

『山岳』第121年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第二百一十一年(2026年)の発刊は本年11月末の予定ですが、「記録」「調査・研究」「紀行・読物」などの幅広い分野で、ぜひ会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。締め切りは5月下旬。

なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に任せさせていただきます。手書き原稿でも結構ですが、できれば下記宛メールでご投稿をお願い申し上げます。

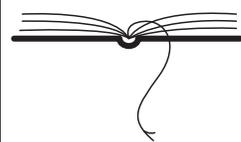
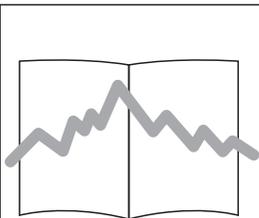
〒123-0852東京都足立区関原三丁目25-3 久保田賢次
☎090-3402-6988 ✉gama331202@gmail.com

(『山岳』編集委員会)

販売する施設となつたおやき学校で、おやき作り体験などを楽しんだ。次回は本年11月21日・22日に群馬支部の主催により高崎市市内と榛名山を舞台に行なわれる予定である。

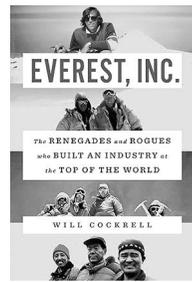
(茨城支部 久保田賢次)

図書紹介



Will Cockerill著

Everest, Inc.



2024年4月
Callery Books
24cm×16cm 346頁
\$ 29.99U.S.+税

もうエベレストに関する本は要らないと、図書委員会でも反対意見も出た本書。エベレスト頂上目前色とりどりのダウンスーツに身を包んだクライマーの大渋滞を写したSNS映像は誰もが目にし、エベレストは観光地と化してしまつたと嘆く。増え過ぎた一般客、高額な料金を徴収し彼らを連れて来ているガイドに責任がある、とのコメントが飛び交う。本書は、このガイドたちを中心としたエベレストを取り巻くビジネスに焦点を当てており、エベレスト登頂記とは一線を画す。

ガイドがエベレストで活躍するようになってからの歴史は意外と浅く、1985年が最初と言われた。始まりこそ白人ガイドの下、優れた身体能力を持つシエルパが雇われる関係が主流だったが、今や経験を積んだシエルパやその子孫

が自らガイド事業を立ち上げ、SNSを巧みに使いこなし、人気を博している。欧米の事業者は減り、エベレスト・ビジネスの中心はネパール人にシフトしている。

著者は、現在エベレストで活動するガイドの間で、その思想に大きな開きが見られると言う。多くの欧米人ガイドは応募段階で経歴値を評価し、トレーニングを積ませた上でツアー参加を許可する。コンディション維持を念頭に、可能な限り快適な滞在環境を用意し、料金もそれを反映する。危険と判断した場合、登頂を断念させ、生きて帰す力がガイドの必須条件だ。他方で、物理的に登りを可能にする環境整備に責任を持つが、サポートの人数や、進退の見極めは客自身にゆだねるガイドもいる。エスプレッソ・マシーンや豪華なベースキャンプは提供しない代わりに、料金は抑えられる。後者のスタイルを選ぶ挑戦者が多いが、2023年のシーズン、8000m超の「デスゾーン」で死亡した7名は全てそのような低予算を設定した、シエルパ・ガイドの顧客だったと指摘する。

シエルパ・ガイドとのエベレス

ト登山は危険、と警鐘を鳴らすのが著者の意図ではない。1787年、初めてガイドが顧客を連れてフランスのモン・ブランに登頂して以来、欧米人は200年以上試行錯誤し、資格や規範を作ってきた。ネパール人はたった40年しか

経験がないなか、近年は国際ガイド資格取得や、多様な山で経験を積み努力をしていること、また、ネパール政府も持続的で安全なエベレスト登山を目指して制度設計に本腰を入れていることにも詳しく触れ、今後の進化に期待を込める。エベレストに挑戦する理由は百人百様で、ガイドもその様々なニーズに応えようと多様化している

現状を知ることができると、本書は、蔵書の価値がある一冊と認められたい。
(齋藤 葵)

佐藤昌明著

なぜ白神に登れないのか?



2025年10月
無明舎出版 190頁
四六判 1600円+税

刺激的な書名である。サブタイ

トルに「ルポ・秋田入山禁止問題」とあるように、青森・秋田両県にまたがる人気の「世界自然遺産」白神山地だが、両県でその管理体制に食い違いがあり、特に秋田県側は入山禁止と思っている人が多いという。

入山禁止ではないのに禁止だと思ひ込まれている理由を解き明かすのが本書のテーマで、青森、秋田側で異なる不自然な形が30年以上続く「入山問題」を、ジャーナリストがその原点からわかりやすく解説し、その改善策までを提言する!と帯で謳う。

そもそも問題は1982年、白神山地のブナ林伐採を目的とした「春秋林道」の工事着工に始まるが、翌年には両県で建設に反対する自然保護団体が結成され、激しい反対運動の結果、90年、林道工事は中止となる。さらにその3年後、93年には白神山地の中核地帯が「世界自然遺産」に登録されて今日に至る。

著者は仙台市に本社を置く新聞社の記者として83年、青森総局に赴任。以来43年間、フリー・ジャーナリストになってからも白神問題と関わってきて、2021年に

は同じ版元から『秋田・白神入山禁止を問う』を出版している。

目次を見てみよう。第一章…これからどうする／第二章…禁止でないのに、なぜ禁止に?／第三章…秋田と青森の「違い」と「誤解」／第四章…未踏の原生林ではない歴史の証明／終章…講演会収録「白神問題の真相を語る」と続き、関連年表が付されている。

第三章で著者は、《秋田県側の「ブナの森の聖域化(＝世界遺産の内側)」と、青森県側の「大水害の教訓、生活危機の訴え(＝世界遺産の外側)」。春秋林道反対の住民運動の目指したところの「違い」が、今日の秋田県側の「入山禁止」と、青森県側の「届け出制入山」の違いになって現れた》と綴る。

皮肉にも世界遺産登録を機に、管理の在り方を巡って両県に食い違いが起きたのである。97年、青森県側は核心地域を「指定27ルートの許可制」とし、秋田県側は「原則入山禁止」として別々の形でスタートした(秋田県側は「禁止」の言葉が報道で先行した)。そして2003年、青森県側は自然保護団体の要望を容れて規制緩和、「許可制」から「届け出制」に移行した。

しかし、秋田県側は「原則入山禁止」のまま現在に至っている。秋田県側の「原則入山禁止」地域の面積は、白神山地のブナ林の総面積の2%に過ぎないのだが、これが白神山全体が「入山禁止」と思い込まれる原因になっている。

講演会で著者は、《自然を厳格に閉じ込めるのではなく自然を開放して、人と自然の両立を目指すのが世界遺産の精神であり、遺産価値を後世に伝えることこそが大仕事なことです》と語る。

世界最大級のブナ林と言われる白神山だけに、「木を見て森を見ず」にならないよう、また「宝の持ち腐れ」にならないよう、今後の展開を注視していきたい。

(節田重節)

「引き継ぐ」山岳祭 引き継ぐ 山岳祭



2025年12月
日本山岳会
A5判 144頁
頒価=1000円

本書は日本山岳会が主催・共催・後援などの関わりを持つ、14

の山岳祭(ウェストン祭、小島鳥水祭、岡野金次郎碑前祭、高頭祭、木暮祭、田部祭、横有恒碑前祭、藤木祭、深田祭、久弥祭、宮崎ウェストン祭、木暮理太郎翁を偲ぶ会、播隆祭、泰澄祭を紹介する。創立120周年記念事業委員会が「引き継がれる山岳祭」プロジェクトの一環として3年の歳月を掛けて編集・作製したものだ。

この山岳祭は、日本近代登山の幕開けを主導した本会草創期の人々、雪や岩などに困難を求めアルピニズムを探求した岳人、山々の魅力を豊かな感性で紹介した

人々、衆生の幸福を祈念して高山を開いた行者など11人の事績と偉大さを讃え、顕彰するために日本各地で催されている。

本の構成は、第1章が「山岳祭の歴史」。それぞれの山岳祭の成り立ちと、運営の工夫や苦労話などの歴史。第2章で「11人の物語」として、顕彰される11人の事績を追う。第3章では山岳祭を運営する側の思いや運営上の悩み、これからの展望が座談形式で語られる。本書は登山史上稀有な岳人の評伝でもあり、登山文化史としても興味深い一書である。

(原邦三)



令和7年度第10回(1月度) 理事

会議事録

日時 令和8年1月15日(木) 19時

22時

場所 集会室およびzoom(オンライン)

【出席者】橋本会長、飯田・永田・

報告

柏各副会長、原田・猿渡・

荒川各常務理事、池田・吉

田・大塚・根本各理事、石

川・額賀各監事、(オンライン

参加)望月・梅田各理事

【欠席者】武川、片山各理事

【オブザーバー】節田会報編集人、

長島事務局長(書記)

【審議事項】

1・団体会員規定について(原田) (賛成13、反対0)

令和8年3月31日以降、団体会員の入会を認めない。ただし、大学などで学生が所属するクラブ、自然保護団体や障がい者団体など公益的な団体に限って、会長の承認があれば認めることになる。

2・賛助会員制度の改定について(大塚) (賛成13、反対0)

公益事業(山岳文化の継承、安全登山の啓発、自然環境の保全等)を持続的に推進するため、企業、団体および個人からの支援を安定的に受け入れる仕組みとして、賛助会員制度を再整備したいという提案があり承認された。規程について表現等細部について再確認し、次回理事会で確定とする。

3・電子会員証の発行について(原田) (賛成13、反対0)

スマートフォンを利用して会員証を表示する電子会員証を会員証として扱うことを承認した。年度末の会員証の更新に併せて会員へ案内することになった。

4・山岳祭補助金申請について

(梅田) (賛成13、反対0)

5支部(福井、越後、関西、宮崎、山梨)から提出のあった山岳祭補助申請について承認した。

5・宮城支部マナスル初登頂70周年記念横有恒祭への資金支援(柏) (賛成0、反対13)

宮城支部から5月に実施する右記記念行事に関する費用を本部予算で支援して欲しい旨、依頼があった。審議した結果、本部から拠出するのは難しいということ、方法など宮城支部と相談する。

6・海外登山助成委員会の委員の更新(柏) (賛成13、反対0)

海外登山助成委員会の委員について承認した。

【協議事項】

1・京王プラザホテルへの清算および次回会場確保について(原田) 創立120周年記念式典(ウェルカム・パーティ、晩餐会含む)の京王プラザホテルとの精算が確定した。また、令和8年度年次晩餐会の会場について協議した。

2・令和8年度事業計画作成について(原田) 令和8年度の事業計画について各理事の分担を決め、作成するこ

とを確認した。

3・支部行事等への理事派遣に伴う旅費について(原田)

支部行事等へ理事が出向く場合の旅費について、おおよそ年間必要となる費用について事務局から提示があった。財政状況が厳しい折、予算策定時に検討が必要ということになった。

4・事業計画に関する委員会および支部ヒアリングについて(原田)

令和8年度は予算についての確認が主たる目的となるため、委員会中心にヒアリングを実施することにした。2月以降実施の予定。

5・会報の電子配布の手順について。 会報を電子データで配布することを会員へ周知する手順について確認した。次回理事会までに事務局で案内文書等をまとめ、理事会に提示することになった。

6・準会員制度の見直しについて 方向は承認されているので、次回理事会で審議する。継続審議。

【報告事項】

1・入会承認報告(事務局) 正会員8名、準会員2名の入会報告があった。

「会員優待サービス」変更のお知らせ

(会員サービスWG)

会報1月号に同封した「優待サービス一覧」に、以下のような変更があります。

*【東北部】湯の台温泉・鳥海山荘 入浴料100円引きに変更。

*【東南部】アルプ天元台 / 天元台ロープウェイ・リフト 基本宿泊料金の5%引き / ロープウェイ・リフト共通往復券の大人のみ200円引き、パスポート1日券の大人のみ300円引きに変更。

*【北アルプス】七倉山荘 日帰り入浴料の割引を廃止。宿泊者に限りソフトドリンク1杯サービスに変更。

*【同】烏帽子小屋 山小屋直通電話を050-1726-2628に変更(6月下旬〜10月上旬のみ)。

2・退会者報告(事務局)

物故会員 4名(永年会員 3名、通常会員 1名)、退会 14名(永年会員 2名、通常会員 9名、準会員 3名)の退会報告があった。

3・寄附受け入れ(猿蓑)

1件の寄附を受け入れた。
 4・監査法人中間監査報告(猿渡) 監査法人からの中間監査報告があった。
 5・理事会からの令和8年度予算策定方針に関する財務委員会の提案(猿渡)
 財務委員会からこれまでの提言のまとめと支出制限についての提案があった。(猿渡)

電子版会報「山」の登録のお願い

会報のカラー版を電子版でお送りしています。発送費削減のためにご協力をお願いいたします。電子版を登録しても通知(メール)や電子版が来なかった方は迷惑メールなどを確認のうえ、再度登録をお願いいたします。
 不明な点は、デジタルメディア委員会(internet@jac.or.jp)にお問合せください。
 【電子版への登録】
<https://jac1.or.jp/kain/>
 2025040135272.html



6・令和8年度事業計画、予算の提出依頼(原田)
 12月末に委員会、支部に令和8年度の事業計画・予算の提出を依頼した。締切は1月末。
 7・支部代表アカウンターの切り替え準備を依頼(原田)
 支部代表アカウンタをJACCアカウンタに切り替えることになった。支部宛のメールアドレスが変更になる。

8・常務理事会および理事会のメンバーング・リストのJACCアカウンタへの移行(永田)
 今後、会内のやり取りはJACCアカウンタに移行されていく予定。

9・ザ・マナスル・デー(相)
 5月23日、日本山岳会主催、外務省ほか共催で実施する方向で進める、という報告があった。

10・危急時のメディア・コントロールについて(相)
 危急時(主に山岳遭難)のメディア・コントロールについて、広報委員会にて検討を始めたという報告があった。

11・秩父宮記念山岳賞受賞講演会(飯田)
 令和7年度同賞受賞講演会を6月20日午前中(総会の前)に同会場

で行なうという報告があった。
 12・紺綬褒章授与(永田)
 遅れていた上原充会員への紺綬褒章の授与を12月18日に行なったという報告があった。
 13・永年会員からの寄附に対するお礼(永田)
 寄附に対するお礼を今月号の会報に同封するという報告があった。

【その他】

「山」1月号の進捗状況について
 今後の予定

- 海外登山報告会…3月14日(土)
- 支部連絡会議…3月25日(木)
- 評議員懇談会…4月22日(木)
- ザ・マナスル・デー…5月23日(土)
- 支部連絡会議…5月27日(水)
- 秩父宮記念山岳賞受賞講演会…6月20日(土)
- 定期総会…6月20日(土)
- 事務局連絡

ルーム日誌 8月

- 6日 広報委員会 スケッチクラブ
- 7日 YOUTH CLUB委員会 山行クラブ
- 8日 常務理事会 東京支部 山岳地理クラブ

9日	図書委員会
13日	アルパインスキークラブ フォトクラブ
14日	財務委員会 かつばの会
15日	理事会 みちのり山の会
16日	自然保護委員会 クニ塾
17日	アルピニズムクラブ
19日	総務委員会
20日	東京支部(初級者講習会) 麗山会 バックカントリークラブ
21日	東京支部 山遊会
22日	学生部
23日	アルピニズムクラブ
26日	マウンテンカルチャークラブ
27日	記念事業委員会(引き継がれる山岳祭)
28日	子どもと登山委員会 YOUTH CLUB委員会
29日	記念事業委員会(グレート・ヒマラヤ・トラバース)
30日	東京支部(茶話会)
31日	記念事業委員会 アルピニズムクラブ 1月来室者 306名

会員異動 物故

岡本丈夫(3405) 26・1・25
 山本久子(4761) 25・9・26

中川 武(5679) 26・1・19
 佐藤 正(8458) 物故日不明
 山本康雄(13656) 25・11・8
 近藤政仁(16491) 25・12・3
 阿部正美(16544) 25・11・15
 退会
 高瀬 洋(10071) 富山
 足立みなみ(10803) 京都・滋賀
 安立勝重(10992) 福井
 斎藤英子(11326) 山梨
 大堀泰祐(15478) 富山
 藤井久一(15704) 富山

安藤昌宜(16221) 福岡
 上田 勝(16383) 福岡
 横 孝浩(16651) 群馬
 杉谷正弘(16722) 東海
 石川貴大(17074) 東海
 竹本美香(17094) 東海
 竹島 翼(17150) 関西
 風澤央菜(17365) 関西
 宮永基久(17369) 東京
 坂本文艶(A0456) 東京多摩
 倉崎知恵(A0517) 東京多摩
 乙川ちえみ(A0609) 東京多摩

I N F O R M A T I O N

インフォメーション



◆春の講演会十懇親会のお知らせ

東京多摩支部

日本山岳会創立120周年記念講演でも取り上げられた、GHTの全容について講演とパネル・ディスカッションを行います。2020年にスタートし、6年にわたる旅を通じて知った日本登山史の先人たちの偉業、環境や社会情勢の変化などについて語ります。

講演会終了後、スピーカーも招いて懇親会を開催します。他支部の方も参加可能ですので、ぜひお越しください。

講演 重廣恒夫氏、飯田邦幸氏、轟涼氏
 司会 柏澄子氏

テーマ 「世界の屋根を歩く」
 グレート・ヒマラヤ・トラス5000キロ」講演
 ナトーク

会場 立川女性総合センター1階
 アイムホール

日時 3月15日(日) 9時40分～11時50分(受付9時15分)

申込み 日本山岳会東京多摩支部

HPもしくは左のQRコードより。3月6日締切。



◆四国八十八ヶ所歩き遍路② 順打ち1国高知参り

山行クラブ

四国八十八ヶ所1200kmを春秋4回の区切り打ち(1年間)で歩きます。2回目は高知県の24番札所最御崎寺から38番金剛福寺まで順打ち。四国八十八ヶ所霊場会公認権大先達が遍路・巡拝・服装などの作法はお教えします。遍路用品は1番札所で購入可。

日程 4月14日(火)～4月25日(土) 11泊12日

集合 14日(火) 高知県東洋町甲浦(カノエ)

駅待合室11時45分。(13日東京発の夜行高速バスで徳島着・JR牟岐線・阿佐海岸鉄道で14日朝着、または

行程

13日甲浦前泊

甲浦―佐喜浜町(泊)―24番最御崎寺―26番金剛頂寺―室戸(泊)―27番神峯寺―唐浜駅―安芸(泊)―唐浜駅―日野須町(泊) 28番大日寺―30番善榮寺―高須(泊)―31番竹林寺―34番種間寺―高岡町(泊)―35番清瀧寺―36番青龍寺―浦ノ内(泊)―中土佐町(泊)―37番岩本寺(泊)―黒潮町(泊)―土佐清水市(泊)―38番金剛福寺(解散)

歩程

1日20～30km(健脚向き)

費用 参加費1万円(通信費、写真代など)、1日1万円(宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代、傷害保険は各自お掛けください。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

定員 8名(先着順)

申込み 4月6日(月)まで 数見

直 ☎090・7204・

4668 ☒sumi88t@gmail.com

◆第14回小島水祭のお知らせ

四国支部

第14回小島烏水祭を左記のとおり、4月4日(土)～5日(日)に本部主管、四国支部主催で開催します

日程 4日㊦碑前祭 香川県高松市の峰山公園小島烏水顕彰碑前 ①峰山公園で讃岐うどんの接待(11時30分～12時45分) ②顕彰碑前で講演会『山岳』の編集と小島烏水(講師は編集者で『山岳』前編集長の神長幹雄氏、碑前祭(13～15時) ③「喜代美山荘花樹海」に移動し懇親会(17時30分～20時)。

5日㊦親睦登山(7～13時ごろ) 香川県観音寺市にある四国八十八景の一つ、高屋神社「天空の鳥居」(稲積山)～七宝山に登る。昼食は各自用意。

参加費 碑前祭は無料、懇親会費は1万円、登山の昼食代も各自。宿泊費は別途。

予約・問合せ 小島烏水祭担当・田所 ☎090・1009・2705 ✉tado-h23@i2.gnobb.jpまたは、四国支部事務局・十河 ☎090・8699・1949 ✉ts0276@mc.pikara.ne.jp

図書受入報告(2026年1月)

著者書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
山本紀夫 編 民族植物学入門：アンデスからヒマラヤへ	440p/23cm	京都大学学術出版会	2025	著者寄贈
今尾恵介 地図/バ直伝 地形図の楽しい読み方：改訂新版/ヤマケイ新書	240p/18cm	山と溪谷社	2026	出版社寄贈
工藤隆雄 ビッケルの神様 山内東一郎物語：近代日本のものづくりと登山史を支えた孤高の職人	299p/19cm	山と溪谷社	2026	出版社寄贈
溝手康史 緊急時に登山者はどう行動すべきか：登山の緊急時の倫理、法律、リスク回避	94p/21cm	デザインエッグ株式会社	2026	著者寄贈
飯田勝之 大分県の三角点：大分県の一・二・三等の三角点の山頂踏査の記録	304p/26cm	飯田勝之(私家版)	2025	著者寄贈

◆編集後記◆

● 関東4支部(栃木・群馬・茨城・千葉)の懇談会で、茨城県の天子温泉に行きました。主目的は、和田幾久郎会員(茨城支部)による「常陸国ロングトレイル」の講演です。奥久慈男体山には三度登っていますが、大子町は初めてで、名物の「ロング風呂」を堪能させてもらうとともに、当地がロング栽培の南限ということも知りました。

● 久慈川沿いに走る車窓から眺めていると、所々植林された畑が散見されました。マレーシアで見たゴム園に似ていますが、漆畑でした。「大子漆」と呼ばれ、輪島塗や春慶塗など高級漆器の仕上げ用に使われるそうで、黄門様こと徳川光圀公が奨励したのがルーツとか。こんな発見があるから、旅はやめられません。(節田重節)

日本山岳会報 山 969号

2026年(令和8年)2月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
 編集人 節田重節
 E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社